

備後渋川氏の盛衰

田口義之

一、名門の余光

『天文日記』「渋川（蓬雲軒、義陸）より一札を以て、尼子事大内と参会致さしめ、同時に上洛すべき由沙汰候」（天文九年四月二十日の条）

戦国時代、備後南部で活躍した国人衆には、古志氏、渡辺氏、杉原氏、宮氏、渋川氏などがある。このうち古志・渡辺氏については、それぞれ『古志家文書』・『渡辺先祖覚書』などの良質な史料を残し、研究も活発である。また、備後の雄族として聞こえた宮・杉原の両氏に関しては、戦前からの長い研究の蓄積もあり、最近では『広島県史』通史編中世で取り上げられ、次第にその全貌が明らかにされつつある。しかし、最後に挙げた渋川氏については、識者の関心も低く、研究者も少ないようである。これには色んな理由が考えられるが、やはり同氏の備後土着が比較的遅く、また、百年に満たぬうちに消え去って行った、在地性の希薄さにその原因が求められよう。

数ある備後の有力武士団の内、渋川氏は容易ならぬ家である。中世史の研究者でも、渋川氏については、足利氏の一族であること、室町時代、九州探題を世襲したこと、本拠を三原市八幡町に置いたことなど位を思



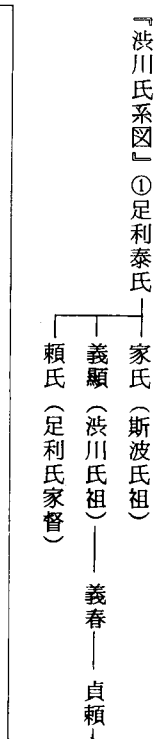
備後渋川氏の本拠
小童山城跡（三原市八幡町美生）

い浮かべるだけであろう。

しかし、身分、格式のやかましかった時代、実は、この「九州探題」という家格は、どうしてどうして、大したものだったのである。

例えば冒頭に掲げた一文である。これは当時大坂石山本願寺の法主として聖俗両界に巨大な勢力をもっていた証如上人の日記の一節であるが、このなかで渋川義陸は、なんと、尼子と大内を参会させ上落させる、と証如に報じたとあるではないか。たかが三原の奥の一領主にしては笑止の沙汰だ、と思われるであろう。しかし、これが室町武家の格式というものなのである。いかに力があっても毛利元就にはできない芸当なのである。しからばその渋川氏とは如何なる武門であったか、以下その概要を述べてみたい。

二、將軍の室家



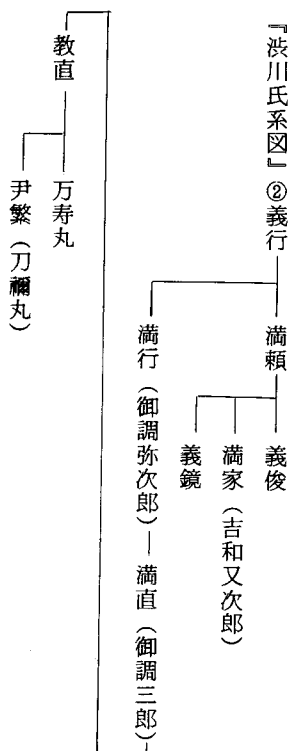
渋川氏は足利氏の一族で、上野国群馬郡渋川保を名字の地とする関東武士である。系図にあるように、渋川氏の祖義顯は、足利泰氏の次男にあたり、兄家氏は斯波氏を起こし、弟の頼氏が足利氏の家督を継いでいる。これは、頼家の生母が北条得宗家の出身だったため、父泰氏が北条

氏に遠慮して三男ながら頼氏に家を継がせたためといわれる。そのため、長男、次男の系統である斯波・渋川両氏の一族中に於ける家格は高く、斯波氏などは南北朝期に入っても「足利」姓を名乗っている程である。このように渋川氏の特徴は、まず、足利本家に最も近い家筋の一つであった事が挙げられる。

そして、渋川一族の発展に一期を画したのは、またもや本家足利氏との関わりにおいてであった。すなわち、義顯の曾孫義季の妹は室町幕府初代將軍尊氏の実弟直義に嫁し、さらに義季の娘幸子は、二代將軍義詮の正室となり、渋川氏は將軍足利氏の姻族として新たな飛躍の時期を迎えるのである。残念ながら幸子は実子に恵まれず、渋川氏は將軍の外戚となることはなかったが、幸子は三代將軍義満の准母として遇され、幕府内に隠然たる勢力を持った。このことが渋川氏の発展にとってどんな意味を持ったか、言を待たないであろう。

(参考) 森茂暁「渋川氏」(新人物往来社刊『室町幕府守護職家辞典』)

三、九州探題渋川氏

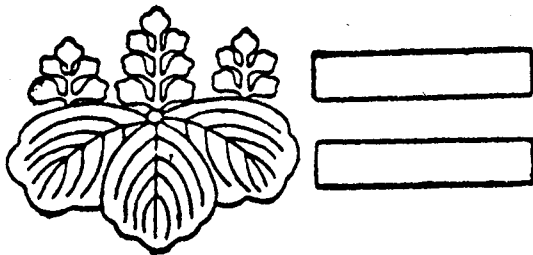


渋川氏がこの後、室町時代を通して九州探題を世襲できたのも、この
 ような同氏の家格閥閥関係と無縁ではない。足利幕府は当初一色氏を九
 州探題として派遣していたが、懐良親王を奉じた「征西府」の勢力が博
 多に伸びて来ると、抗し得ず京都に引き上げてしまう。そして、その後
 貞治四年（一三六五）九州探題に補任されたのが直頼の子義行であった。
 この任命劇の背後に幸子の陰があったのは勿論である。だが、当時弱冠
 一八才に過ぎない義行にとってこれは重荷であった。丁度、九州南軍の
 最盛期にあたり、義行は九州の地を踏むことなく、五年後には解任され
 てしまうのである。しかし、この出来事は渋川氏にとって全く無意味な
 ことではなかった。義行は九州探題の任命と同時に備後・備中の守護職
 に任ぜられており、このうち備後地方を拠点とする大きな契機となった。
 渋川氏が本格的に九州探題を世襲するのは、応永三年（一三九六）、
 同職として九州の統治に成功した有名な今川了俊が將軍義満の忌避に触
 れ、解任された後のことである。これには又、幕府内での閥閥、派閥の
 暗闘がその裏にあった。すなわち、今川了俊は斯波氏のライバルであっ
 た細川頼之の後援を得て探題に任ぜられ、その統治に成功したのである
 が、その死去後は支援者を失い孤立していた。これに乗じたのが当時九
 州に野心を抱いていた周防の大内義弘である。義弘は將軍に了俊を讒し、
 將軍も了俊の権勢の増大に危惧していただけに、この讒言に簡単に乗り、
 彼を解任してしまったのである。そして、その後任に任ぜられたのが義
 行の子満頼であった。満頼の背後には幕府管領斯波義将がおり、この人
 事を強行したのである。先に述べたように渋川氏と斯波氏はその先祖が

同母兄弟に出、互いに庇護しあう関係にあったのである。ここにも渋川
 氏がその力量ではなく、血統と縁故によって世に出るといふ性格がよく
 現れている。

九州探題としての渋川氏は、満頼、その子義俊まではなんとかその体
 面を保ったものの、応永三十年（一四二三）、義俊が少弐満貞と戦って
 敗れて以後は衰退の一途をたどることになる。すなわち、義俊の後は満
 頼の弟満行が継ぎ、以後満直、教直、万寿丸、尹繁と探題職を継承して
 行くが、殆ど虚名を擁するのみで、万寿丸などは長享元年（一四八七）
 二月十一日、家来の足助・森戸・斎藤氏によって害される始末であった。

（参考）川添昭二「九州探題の衰滅過程」



足利一門の家紋（桐紋と二引両）

一、備後と渋川氏

『渋川古文書』渋川直頼讓状（「御調郡誌」所収）

- 一所 信濃国有阪郷
- 一所 同 国長土呂郷
- 一所 陸奥国酒谷村
- 一所 同 国小紫村
- 一所 同 国沼木郷
- 一所 同 国赤阪郷
- 一所 備後国御調別宮
- 一所 同 国山南郷
- 一所 同 国山田村
- 一所 同国福代村 但大光明寺寄進
- 一所 佐渡国守護職

右所々、本御下文以下手継状等を相副、金王丸に讓與する所なり、依つて讓状件の如し

観応三年（一一三五）六月二十九日

直頼（花押）

先に掲げた『渋川系図』②の満行、満直のところに「御調弥次郎」

「御調三郎」とあるのは、渋川氏の所領が備後に有り、彼らが元々備後御調郡に本拠を構えていたからである。そのことを示すのがこの章の冒頭に掲げた『渋川直頼讓状』である。この文書によると渋川直頼は、信濃国有阪郷以下の所領を証文を添えて金王丸（義行）に讓っているが、

この中に「御調別宮」以下の備後の所領が見え、既にこの時期、渋川氏は備後地方に所領を獲得していたことが判明する。ただし、その獲得の経緯などは不明である。思うに直頼の父義季は、建武二年（一一三五）七月、中先代の乱に際し武蔵女影原で打死しており、その恩賞として尊氏より与えられたものであるうか。しかし、所領を讓られた義行は始め武蔵国足立郡に居城しており、現実に御調別宮以下を支配していたかどうかは判然としない。

渋川氏が実際に備後に影響力を及ぼしてくるのは、先に述べたように、義行が貞治四年（一一三五）、九州探題に任せられ、備後の守護としてこちらに赴任して来て以来のことである。義行は探題として殆ど何もなし得なかったが、九州赴任の前提として備後の所領を有効に利用したことは疑い無く、ここに渋川氏と備後との関わりが本格的に生まれるのである。

九州探題渋川氏一族のうち、備後を本拠とした可能性があるのは、満家・満頼・満行・満直の四人である。このうち満家・満行・満直の三人は系図にそれぞれ「吉和」「御調」を号したとあり、その由来は吉和（尾道市）御調別宮（三原市八幡町）という備後の在名に因むことは間違いない、彼らが備後に本拠を構えていたことは事実と思われる。また、満頼も「国郡志御用ニ付下しらへ書出帳宮内村」（『三原市史所収』）によると三原市八幡町宮内の勝山城に居城したとあり、前後の事情から九州探題となる前に同地に居住していたとしても不思議ではない。

また、九州探題としての渋川氏が備後に拠点を構えていたことは次の

史料からも推定される。すなわち、『満濟准后日記』永享二年（一四三〇）閏十一月三日の条に、九州探題（満直）の使者板倉が上落し、探題の備後の所領のことについて内々嘆き申し入れた、とあり渋川氏は九州にあつても備後の所領の経営に強い関心をもっていたことが知れるのである。

そして、以上述べた室町時代の九州探題渋川氏の存在を前提にして、次に述べる、義陸・義正・義満と続く、戦国期の備後渋川氏の活躍があつたのである。

五、渋川義陸

『渋川氏系図』（『御調郡誌』をもとに筆者作成）

尹繁——義陸——義正——義満（陸景）

右兵衛佐 王寿丸 今探題

蓬雲軒等祇 右兵衛佐 天正元年死

室宮上野介女 実小早川扶平男

室毛利弘元女

今日、『御調郡誌』などで伝えるところによると、備後の国人衆としての渋川氏は、戦国時代初頭の義陸に始まるようである。義陸は同書によると最後の九州探題尹繁の子と伝えるが、このことは他の良質な史料に見えず、不詳と言はかない。ただし、『天文日記』の記述などによると、義陸、義正、義満と続く備後渋川氏は、当時「渋川武衛」、或い

は「今探題」と敬称されており、彼らが九州探題渋川氏の正当な後継者と見なされていたのは事実である。

義陸が備後に本拠を構えたのは、言うまでもなく、九州に於ける渋川氏の権勢が全く地に落ちたからである。先に述べたように、探題としては七代目にあたる万寿丸は長享元年、家来によって害されているが、跡を継いだ尹繁も全く虚名を擁するのみで、その活動はほとんど知られていない。義陸がこのような九州に於ける自家の現状に見切りをつけ、先祖以来勢力を培って来た備後に居を構えようとしたのは当然と言えは当然であろう。

その移住の時期は判然としない。もし、義陸が尹繁の子とすれば、尹繁の成人は明応年間（一四九〇年代）と考えられているから、その頃の生まれとして永正十年（一五一三）前後であろうか、その直後永正十四年（一五一七）を史料上の初見として、備後に於ける義陸の活躍が知られるのである。

戦国初頭の備後は、周防山口を本拠とした大内氏と、出雲から南下する尼子氏の角逐の場であつたと言えるが、史料を見る限り、義陸は初め大内氏に属していたようである。すなわち、永正十四年八月、備後で尼子氏の軍勢が動き、世羅郡赤屋や沼隈郡山南の大内方の拠点で攻撃されたが、大内方の中心となつて尼子勢の撃退を図つたのが義陸であつた。

『萩藩閩閩録』六七 高須惣左衛門書出 渋川義陸書状

山南表の儀に就いて、山中所へ懇書披見候了、入心せられ候、時宜申

され喜び入り候、然る間彼の後巻事方々調候、高山より先勢として、昨日眞田備中守その外各々罷出候、相残る者共明日悉く罷出るべく候由申し候、内郡よりは三吉舎弟平次郎、吉舎より越中守昨夕赤屋に至り出張由申し候、今日御調木栗辺り迄着陣あるべく候哉、諸口調候間、今太山へも今朝人遣わし候、明日宮上自身出らるべき事肝要の通申し遣わし候、定て別儀あるべからず候哉、その表の儀、毎事一馳走喜悅たるべく候、沼田・竹原警固、明日罷上るべく候由相定め候、将又此の間要害より教順出候、頓て又籠り候、爰元の趣具さに申し遣わし候、恐々謹言

九月七日

義陸判

高須右馬助殿

ここで「山南表」云々とあるのは、渋川氏の所領が沼隈郡沼隈町山南にもあったことによる。備後渋川氏の所領としては三原市八幡町周辺の「八幡庄（御調別宮）」が有名であるが、沼隈郡山南地方の経営も義陸以下渋川三代が力を入れた所で、現在でも渋川氏の位牌を伝える悟慎寺など多くの史跡や文化財が残っている。

また、義陸は九州探題の權威を利用して周辺の国人衆を傘下に収めたようである。渋川氏の本拠御調郡八幡庄の南に接する三原浦（現三原市）は室町時代、杉原氏の一族高須杉原氏によって支配されていたが、この高須杉原氏は、戦国時代にはいると渋川氏の傘下に入ったようで、永正八年（一五一一）一〇月、渋川氏の老臣板倉三勝は高須彦次郎に山南郷内の地を与えている（関関録遺漏）。また、尾道市北部に力をもった木

梨杉原氏も一時渋川氏の勢力下に入ったようで、戦国初頭の当主は義陸の一字を受けて「陸恒」と名乗っている（同上）。

しかし、大永から天文初年（一五三〇頃）にかけて尼子氏の勢力が高潮に達すると、義陸は一転して同氏に属し、その手先となって活動することになる。すなわち、本稿の最初に掲げた『天文日記』によると天文六年（一五三八）十二月十四日の条から尼子方として見え、その関係も密接で、同日記によると本願寺から尼子氏に送る書状は渋川氏が取り次いでおり、その姿勢は強者に圧迫された弱者というよりも、より積極的に尼子氏を利用して自家の勢力を挽回しようとした意図が窺える（同上など）。なお、義陸のこの姿勢は、その室家である宮氏の意向も多分にあったようである。今まで知られていなかったことであるが、『天文日記』によると義陸の妻は宮上野介の娘であって、宮氏が尼子に一味して家を滅ぼしたことはよく知られており、このことが考えられるのである。また、義陸で特筆すべきことは、『天文日記』の筆者証如上人との交友である。同日記によると証如上人との交渉は天文五年（一五三六）十二月七日、義陸が本願寺の坊官下間上野に書状を送ったことに始まり、以後天文二十年（一五五一）に及んでいる。義陸が本願寺と交渉を持ったのは、渋川氏の所領が本願寺の領国加賀国にあったためである。加賀国に於ける渋川氏の所領は野代庄で、同所は野代村とも呼ばれ、『御調郡誌』所収の直頼讓状（前掲のものとは別。年月日不詳）に見える、同氏としては由緒のある所領であった。しかし、この地は永く不知行であったようで、義陸は本願寺の力でその回復をはかったのである。同日記

によると義陸は、証如の了承を得て家臣内海四郎左衛門を代官として加賀国に派遣したが、結局、義陸のこの企ては在地の反発を受け失敗に終わっている。なお、義陸が本願寺と交渉を持つことが出来たのは、その所領山南に真宗の有力寺院光照寺があったからである。同寺は中国地方に於ける浄土真宗の最初の布教拠点で、当時中国地方全域にわたり数百ヶ寺の末寺を持つ大寺であった。

六、探題宗蓮公

『小早川家文書』九一号 渋川義陸書状

備州八幡三ヶ村の内、三戸佐渡守知行分十二名（巨細別紙有り）事、人躰此方契約に就いて、彼地これを進らせ候、諸役等は、先規の如く仰せ付け、知行有るべく候 恐々謹言

八月六日

義陸（花押）

小早川掃部頭殿

義陸の嗣子、義正の出自に関して注目されるのは、『小早川系図』と右の義陸書状である。『御調郡誌』に渋川系図を載せて以来、義正は義陸の実子と信じられて来た。しかし、どうもそうではないらしいのである。

小早川家の系図によると、戦国初頭に活躍した扶平の三男に『義氏』という人物がいる。そして、同系図によると、この人物は『探題宗蓮公』



小童城中に残る渋川義正の墓石
（右端は筆者）

と号したとあるのである。『探題』とは何を意味するのか、九州探題を世襲した渋川氏以外に考えられない、というのがその理由である。そこで改めて右の義陸書状を読み直してみると、この文書は義陸が義正を小早川家から養子として迎えるにあたり、その「結納」として八幡庄内の十二名を小早川氏に与えたものであることに気付くのである。勿論、同文書中の「人躰」とあるのが義正のことである。同書状に就いては『三原市史』などで義陸が小早川氏に援助を請うために土地を割譲したものとされてきた。しかし、それでは「人躰」の意味が通らない。養子契約の文書と考えれば意味が通るのである。系図では「義氏」とあるが、これは「義正」の誤りであろう、「氏」と「正」の草書体は酷似しており、転写の際の誤記と考えられる。

義正が小早川家の出身と考えれば、永正十四年の尼子氏の攻撃の際に、何故義陸の要請に対して小早川氏が援軍を出したかよく理解出来る。それは小早川氏にとって姻家の危機であったのであり、義陸にとっても養子の実家に援助を乞うのは理由のあることだったのである。

また、「毛利家文書」などによると、義正は、その妻に毛利元就の妹を迎えているが、このことも戦国期の渋川氏の動静を考える上で見過ごすことは出来ない事項である。

前節で述べたように、義陸は天文年間、出雲の尼子氏との関係を深めていたが、天文十年（一五四一）一月の吉田郡山城に於ける尼子氏の敗北は、渋川氏の存続にとって大きな脅威となった出来事であった。しかし、ここで義正の妻に毛利氏の女を迎えていたことが大きな意味を持つのである。つまり、この尼子氏の敗北後、義陸が身を引き、義正が渋川氏の当主として振る舞うことによって、渋川氏はその危機を脱することになるのである。

義正の文書としては、天文十年一月二十二日付安藤又七充てのもの（『御調郡誌』所収）が知られるが、この文書こそ義正が尼子氏に深入りし過ぎた義陸にかわって、渋川氏の全面に出たことを示す注目すべき文書なのである。

しかし、このことは別の面から言えば、渋川氏がその独自性を喪失する端緒ともなった。尼子氏の攻撃を撃退した毛利氏は、以後戦国大名としての道をひた走ることになるが、渋川氏は同氏の庇護下で次第にその独自性を失い、「今探題」或いは「八幡様」と敬称されるだけの名目的

な存在となって行くのである。



渋川義正花押
(桑田家文書)

七、渋川氏の滅亡

毛利氏が戦国大名化するにあたって、九州探題の家格をもつ渋川氏の存才は、一定の利用価値を有していたに違いない。しかし、中国地方に於ける毛利氏の覇権が確定すると、その存在は次第に疎ましくなってきたと考えられる。彼の織田信長は足利義昭を奉じて上洛を果たすと、一転して義昭の活動を封じ込めようとしたが、実力者にとって権威は、それが存在するのみで良く、それ以上であってはならないのである。

渋川氏の場合も同様であろう。「御調郡誌」などによると、渋川氏は三代義満（陸景とも）の代、天正元年（一五七三）二月、その死去によって断絶の非運に見舞われたと伝える。同書によれば、断絶の原因は義陸に嗣子なきためとあるが、如何であろうか。というのは「芸藩通志」によれば、御調郡本庄村の里正一介は渋川義満の子孫で、系図・讓状などをもち伝えていたとあり、また「毛利家八箇国時代分限帳」によれば、天正一九年頃、渋川源次郎という者が御調郡の内で四九四石余の給地を有しているのである。勿論、「芸藩通志」の伝える里正一介や「八箇国

時代分限帳』の渋川源次郎は、渋川氏の庶流であって、嫡流はこの時断絶したと考えても良い。しかし、『萩藩閥閥録』巻七六村上権右衛門書出などによれば、義正の妻毛利氏は天正五年まで生存しており、毛利氏から養子を迎えるという手段も残っていた筈である。

結局、毛利氏は渋川氏を存続させる気持ちは毛頭なかったということである。ということは、この時期渋川氏は、既に毛利氏にとって利用価値がなかったということ、裏返せばかえって邪魔になる存在であったことを意味しよう。

天正元年と言えば、あの信長が義昭を京都から追放した、所謂室町幕府滅亡の年である。同じ年に備後でも室町の名門渋川氏が史上から消えて行った。偶然とは言え、歴史の流れを感じさせる出来事である。



渋川氏が九州との連絡用に築いたと考えられる鳴滝山城（尾道市吉和町）